

生徒の30年後を見据えた英語教育の実践について

～ 思考力・創造力・共感力を高める プロジェクト型学習の実践事例 ～

香川県立高松高等学校
教諭 大森 絵美

1 はじめに

昨今の社会の変化はめまぐるしく、本校の英語教育も知識習得を強調するだけではなく、英語を用いた活動を取り入れたり、即興型英語ディベートに挑戦させたりと大きく変化してきた。AIが登場し、近い将来ロボットが人類の総数とほぼ同数になるとも言われている（ブレット・キング『拡張の世紀』2018）。30年後、そのような社会の中核を担うであろう生徒には、「どのような社会になっても、自ら道を切り拓いていく人間になってもらいたい」という思いが、私の指導の根底にある。そのような人間になるために必要な資質は、「既存の知識を総動員して多角的に**思考**し、知識を融合し、柔軟に考えることによって新たなものを**創造**し、対話を通じて良識ある判断をするための**共感力**を持つこと」であると考えている。

現在の英語教科書では、環境問題や経済格差の問題など、現代社会の問題点を鋭く突いたものが題材とされていることが多い。しかし、生徒は、教科書に出てきた英語は、語学上の知識として覚えるものと考えている傾向にあり、素材の内容をじっくりと考えることをせず、文法や語彙などの知識を得ることに終始しているように見える。そのような現状を打破するために、プロジェクト型学習の実践を行うことによって、生徒の**思考力・創造力・共感力**の育成に取り組んでいる。その実践とは、グループで協力してテストを作成するというものであり、またその活動をより実りあるものにするために、新聞記事の活用、文学的教材の活用を実践している。

2 実践内容・方法

まずは新聞記事の活用、次に文学的教材の活用、最後にプロジェクト型テスト作成を紹介する。

(1) 新聞記事の活用（高1・2・3年生対象）

授業の帯活動として、生徒に関心を持ってもらいたい記事を英語もしくは日本語で説明し、その要約や感想を授業中に簡単に書かせる。そして、その紹介した記事のうち、最も興味がある記事について、考えたことや感じたことを週末に英語で書かせるという活動である。この活動の中では、その問題の原因や社会的弱者は誰なのかという視点を意識させるようにしている。

(2) 文学的教材の活用（高1・2・3年生対象）

文学は教科書の中でも、大学入試においても最近使用頻度が減っている。しかし、文学に触れることにより、登場人物や筆者の思いを想像するという力が培われる。本校では長期休業中に偉人伝や物語を読むことを課し、私自身は校内模試の作成の

際に、倫理的哲学的な題材を出題している。人間が抱える内面的な苦悩や本能は、時代や場所を越えて存在し、将来において、どんなに科学技術が進歩し生活が便利になったとしても、人間は同じような内面的問題を抱えているだろう。その際の拠り所として、先人の知恵を頭の片隅に置いておいてもらいたいと考えるが故である。

(3) プロジェクト型テスト作成 (プロジェクトT) (今年度は時間割の都合上、高1対象)

まずこの説明をする前に、私が定期考査作成上心がけていることを述べる。私は英語コミュニケーションの定期考査を作成する際、少なくとも1題は、教科書の素材を基にオリジナルで文章を創作したり、同じ内容を扱っている別の素材を見つけて、それを出题するようにしている。それは、生徒たちに、身につけた知識をどのように応用して問題を解決するのかを、新しい英文の中で試行錯誤してもらいたいからである。

プロジェクトTは、このテスト作成を生徒自身がグループで行う活動である。生徒には、教科書の素材からオリジナルで文章を創作し、その文章でテストを作るというプロジェクトを課している。その際に必要なステップとして、

- ①素材を読み込み、文法・語彙等の知識及び題材内容の知識を頭に入れる
- ②素材の主題(筆者の意図)を考える
- ③素材に使われている英文を用いながら、文章を創作する
- ④創作した文章の中で、問う箇所を考える
- ⑤配点を考える

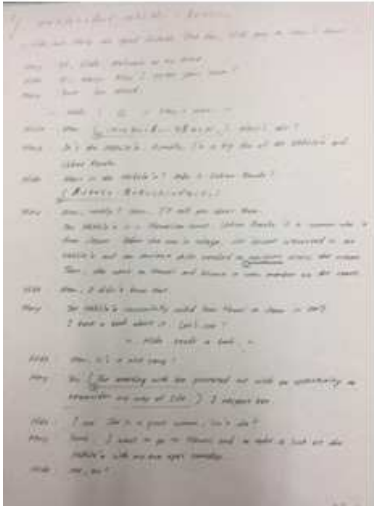
を挙げ与えている。

以上のステップを行う際のルールとして、

- a) 教科書の本文をそのまま使用せず、その本文を元に対話文を創るなど、話を創作すること
- b) 答えが1つに定まる **closed question** だけではなく、文章の行間を読む設問や登場人物の意図を尋ねるような、複数の答えや生徒自身の考えを引き出す **open question** を必ず入れること
- c) グループで協働作業を行い、解答する生徒のことを考えて平均得点率を6割程度にすること

を設定している。

a) の設定理由は、生徒自身が文章を創ることで、教科書の素材をしっかりと読み込み、それをどう生かすかを考えるため、思考力・創造力の育成につながると考えるためであり、b) は、能動的に文章を読み、多角的・批判的に文章を読み思考したり、文章に対して共感する姿勢にもつながると考えるためである。またc) は、自分とは異なる視点を知り深い学びを促し、さらに、解答する生徒のことも考えるため、思考力や共感力育成につながると考えるためである。テストを作成した次の時間に、そのテストを他のグループが解き、問題に対するコメント(ピアフィードバック)をもらい、答案を採点して平均点を出す。これが活動の流れである。



生徒が作成したテストの一部



プロジェクト T に熱心に取り組んでいる様子

3 実践の成果

ここでは、主にプロジェクト T の活動の成果について述べる。まず目に見える成果として、生徒は、普段の授業ではやや受け身的であるが、この活動では正確な読みとりが求められるために能動的に読解活動を行い、テスト作成にグループで積極的に取り組む姿勢が見られた。特に、話や設問を作っている時の活発なインタラクションには驚かされた。またアンケートを取ったところ、この活動自体に対して多くの生徒が好印象を抱き、「難しかった」が「楽しかった」と答えていた。

以下が、生徒のアンケートの主な結果である。

- ①物語を作るのは難しかった (93.5%) 楽しかった (87.1%) [思考力・創造力・共感力]
- ②設問を作るのは難しかった (96.8%) 楽しかった (90.3%) [思考力・創造力・共感力]
- ③教科書の英文の使い方を考えた (83.9%) [思考力・創造力]
- ④グループ全員で協力して取り組めた (93.5%) [共感力]
- ⑤今後普段の授業の取り組み方が変わる (96.8%)

この⑤の結果が本プロジェクト型学習の一番大きな成果であった。具体的に、どのように普段の授業の取り組み方が変わるかを自由記述させた結果、「より一層本文をしっかりと読み込むようになる (多数)」「真剣に音読し、自分から考えるようになる」「より積極的に理解しようとするようになる」「文章の中で英文がどのように使われているのかをもっとよく見る」などの意見・感想が見られた。

生徒の全体的な感想としては、「テスト作成は非常に難しかったけど、自分の勉強の復習になった」「文章を違う視点から捉えられる」「平均得点率を6割にするのが難しかった」「みんなに楽しみながら苦しんでもらえるテストを作りが、プロジェクト T の文章創作の段階で、その下地となっていることは明らかである。例えば、生徒の創作した話の中に、新聞記事で扱った海洋上のプラスチックごみの問題が取り込まれていた。これは、生徒の頭の中で知識の融合が起こった証拠と考えられるだろう。さらに、次の課に入ると、休み時間にその課の内容に関わる本を読んでいる生徒がおり、次のテスト作成では、その本の内容から出題したいということであった。これこそ、主体的、探究的な学びであると言える。

4 普及させたい取組と期待される効果

3つの活動すべてが相互に関連しているため、全てが普及させたい取組であると言いたいところであるが、特に、プロジェクトTは、生徒が学んだことを自分の中に取り込み、その知識を元に新たなものを他者と共に創るという、まさに思考力・創造力・共感力を育むことのできる活動であると考えます。また、生徒のその後の学びの積極性をも促すことができる、まさに一石二鳥の活動である。テスト作成という活動は、本校の生徒の高い進学意識から彼らが真剣に取り組む最適な活動だと考えて設定したが、プロジェクト型学習の効果、有効性に鑑みて、各学校の実情に合わせた観点による活動を設計することで、他校でも、高校のみならず中学校においても実践することが可能であると考えます。例えば、中学校においては、英語が得意な生徒と不得意な生徒とが協働してこの活動を行うことで、英語が得意な生徒の、文章を読んだり学習したりする視点を知り、今後の学習に取り入れることができる。また、他教科の知識等を融合して自分たちの好きな話を創作することで、テストをより身近で楽しいものとして捉えることができる可能性がある。

また、英語が教科化される小学校高学年においては、テスト作成はしないまでも、例えば、「道順を教える英語」を学んだ後で、最寄りの駅から町内の隠れた名所や飲食店までの道順を英語で書いたマップを作成することをプロジェクトとして課すことにより、実際に使える生きた英語を、友だちと協働して楽しく学べる効果があると考えます。

5 課題及び今後の取組の方向

今後は、生徒が作るテストの質を上げること、そしてグループ内の役割分担を確実にして、一人の生徒に多くの負担がかからないようにする手立てを考えることが必要である。また学年の最後には、まとめとして「理想の教科書」を創るというプロジェクト型学習を実施したい。さらに、本校だけでなく、他校の先生方への普及という点では、「さぬき高英談話会」という有志の英語教員が集まって月に1度香川大学で実施している勉強会があるが、そこで発表して、その意義を検討し、新たな提案をもらって、さらに実りあるものにしていくと共に、他の学校への普及にも努めたい。

社会では、2020年の大学入試改革による「共通テスト」や「外部試験」の導入が語られ、英語教育界はまさに「激動」の時代である。米国では公教育への不信や、ネット経由で良質な教育が受けられるようになってきたことから、ホームスクーリングが広がっているようである(『朝日新聞』2019.4.16)。このような時代だからこそ、級友がそばにいるからこそできる、共に学び、共に考え、共に創り上げていく、そういう授業を実践し、生徒の30年後を見据えた教育に取り組んでいきたいと考えている。

<参考文献>

ブレット・キング (2018) 『拡張の世紀 テクノロジーによる破壊と創造』(上野博 訳) 東洋経済新報社

山本崇雄 (2019) 『「教えない授業」の始め方』 アルク

『朝日新聞』2019年4月16日朝刊「(世界発2019) 学校通わず 先生は親 ホームスクーリング 米で広がる」